
浮気女と首のない間男。

ネアンデルタール家元

暁～小説投稿サイト～ By 肥前のポチ

<http://www.akatsuki-novels.com/>

注意事項

このPDFファイルは「暁く小説投稿サイトく」で掲載中の小説を「暁く小説投稿サイトく」のシステムが自動的にPDF化させたものです。

この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「暁く小説投稿サイトく」を運営する肥前のポチに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

浮気女と首のない間男。

【作者名】

ネアンデルタール家元

【あらすじ】

エルサレムの街を路面電車がひた走る。ユダヤとアラブ。異なる宗派や人種の街区を縫って文化の橋渡しをする。エルサレムは山あり谷あり。複雑な政治や起伏が激しい感情を象徴するようだ。そんな一角に人材バンクがあった。文字通り人間を預金するのだ。成人一人を預けるとだいたい年利で1%つく。雇用主は自動預け払い機に従業員を放り込んだり降ろす。たまに利子がついて吐き出される。指とか手足がチャリンチャリンと出て来る。人体パーツには使用期限があってすぐ腐ってしまう。だから早めに組み立てないといけな

い。こうして従業員は勤務先を辞めたり入ったりする。同じ企業を出入りするたびに経験値が溜まる。石油王のハッサンは今日も人材バンクのATMで召使を出金しようとした。すると店のシャッターがガラガラと閉じた。待ち行列の客たちも閉じ込められた。「しまった！これは八方塞がり雪隠詰めだ！」誰かが叫んでパニックになった。人材バンク銀行八方塞がり雪隠詰めとは暗証番号の入力も再発行も一切失敗する。パスワードリマインダーに記録した暗証番号も役に立たない。「システムエラーです」しか表示されない。もう何もやっても八方美人だった。しかし銀行頭取がやってきて試すと何ともないのだ。八方塞がり雪隠詰めとは面妖である。それがこともあろうかハッサンを巻き込んだ。「うわー。ここから出してくれ」八方塞がり雪隠詰めなので誰も店の外に出られない。「誰か助けてくれー」

八方塞がり雪隠詰めがやめない。「おい！」ハッサンはそこまで焦ってない。これでは店がダメになったと騒ぎになる。その時だ。ハッサンは思いっきり頭をぶつけたが、天井にまで大穴が開いてはびくともしなかった。「すいません！すいません！こんないい場所を知ってました」ハッサンは営業する側なので反省しない。誰も謝らない。謝るにも原因が知りたいので謝った。「すみません。すみません。こんな狭い部屋に住んでいいんですか？」「なんの事だよ？あんたが頭をぶつけたのが悪いんだよ」「すいません。すいません」はつきり言うハッサン。「なんの事だよ。そんな事分かってるよ。私はただこの店の金庫に鍵をさして閉じ込めただけだよ」「いいえ。すみません。すみません」「あんたの方が頭をぶつけているじゃん」「すいません。すいません」

八方塞がり雪隠詰め

エルサレムの街を路面電車がひた走る。ユダヤとアラブ。異なる宗派や人種の街区を縫って文化の橋渡しをする。エルサレムは山あり谷あり。複雑な政治や起伏が激しい感情を象徴するようだ。そんな一角に人材バンクがあった。文字通り人間を預金するのだ。成人一人を預けるとだいたい年利で1%つく。雇用主は自動預け払い機に従業員を放り込んだり降ろす。たまに利子がついて吐き出される。指とか手足がチャリンチャリンと出て来る。人体パーツには使用期限があつてすぐ腐ってしまう。だから早めに組み立てないといけない。こうして従業員は勤務先を辞めたり入ったりする。同じ企業を出入りするたびに経験値が溜まる。石油王のハッサンは今日も人材バンクのATMで召使を出金しようとした。すると店のシャッターがガラガラと閉じた。待ち行列の客たちも閉じ込められた。「しまった！これは八方塞がり雪隠詰めだ！」誰かが叫んでパニックになった。人材バンク銀行八方塞がり雪隠詰めとは暗証番号の入力も再発行も一切失敗する。パスワードリマインダーに記録した暗証番号も役に立たない。「システムエラーです」しか表示されない。もう何もやっても八方美人だった。しかし銀行頭取がやってきて試すともともないのだ。八方塞がり雪隠詰めとは面妖である。それがこともあろうかハッサンを巻き込んだ。「うわー。ここから出してくれ」八方塞がり雪隠詰めなので誰も店の外に出られない。「誰か助けてくれー」

八方塞がり雪隠詰めがやめない。「おい！」ハッサンはそこまで焦ってない。これでは店がダメになったと騒ぎになる。その時だ。ハ

ッサンは思いっきり頭をぶつけたが、天井にまで大穴が開いてはびくともしなかった。「すいません！すいません！こんないい場所を知ってました」ハッサンは営業する側なので反省しない。誰も謝らない。謝るにも原因が知りたいたので謝った。「すみません。すみません。こんな狭い部屋に住んでいいんですか？」「なんの事だよ？あんたが頭をぶつけたのが悪いんだよ」「すいません。すいません」はつきり言うハッサン。「なんの事だよ。そんな事分かってるよ。私はただこの店の金庫に鍵をさして閉じ込めただけだよ」「いいえ。すみません。すみません」「あんたの方が頭をぶつけているじゃん」「すいません。すいません」

謝ってるのは絨毯仲買人のアル・コールだ。「謝ってすむならアラ―は要らない」ハッサンは蛮刀を取り出した。すると魔法のランプが天井から落ちてきて魔人があらわれた。そうしてようやくハッサンは反省をした。魔人は仲買人が呼んだのだ。ハッサンは浮気者で「あの」「なんだ」「申し訳ございません。私のミスで」「なんで謝るんだよ」「ミスが過ぎるんです」「そんなミスで良かったと思ってる」「あんなにミスをなさるのは失礼だ。それにミスに責任を取って欲しい」「でもミスがなかったのが私です」「ミスはミスなんだけど」「誰もミスなんて言っていない。それはどういう事ですか。」「

「すみません。もう一度、ミスをします」幸いハッサンはハッカーではないので、ハッサンがミスからの謝罪なのでハッサンは謝る必要がない。「えっ！」「ハッサンは怒りかけていたが、怒りをやめる。「すいません。もうちょっとミスを訂正して。反省はあります」ハッサンは幸いハッカーではないのでこの場を辞められるだけだ。「じゃあ、もう一度」ハッサンは激怒だ。ハッカーが怒ればハッサン

に説教が来よう。しかし怒りにも怒っても反省をしていないから怒るに怒れない。その怒りのせいでハッサンは八方美人だった。ハッサンは誰もいないのにも関わらず、周りには八方美人だ。「何なんだ、この店は」ハッサンは八方ふさがり雪隠詰めがやめない。それにしても外には八方塞がり雪隠詰めはなく、ハッフルーフだけが あった。

ハッサンは「今は何をやっても八方塞がり雪隠詰めのようにだ」「八方塞がり雪隠詰め？」ハッサンは首をかしげた。「ハッサン、何やらかしてるんだ」「この店が大変だぞ。誰も話してくれない。誰も話してくれない。ハッフルーフに話した時もこんなこと言わなかった」「ハッフルーフに言えばいいじゃん。何の何の」ハッサンは「言われな い」言っている意味がわからないハッフルーフは、八方ふさがり雪隠詰めと勘違いして行き違い強盗をしかけた。「お前、何をやっているんだ」ハッフルーフはハッサンに突っかかった。何を言っているかわからないのでハッサンはハッフルーフが何をやったかまた聞いた。ハッフルーフは「だから言っただろう。雪見安弥を逃がしたのは俺じゃない、僕の仕事だ」ハッサンは言い返した。ハッフルーフはそんなこと言えなかった。ハッフルーフは雪見安弥を逃がした。ハッサンが雪見安弥を逃がした場所を通ったのは確かなのだ。ハッフルーフの言葉など、ハッサンにはもう届かなかった。「ハッフルーフ、俺に何をした？」ハッサンはハッフルーフの方を向いて聞いた。

「何って、そりゃ、雪見安弥を逃がした奴が、どうして金を貰い女連れて歩いてるのかって考えていたんだよ」

「何も考えてなかったのか？」

「考えなかった。俺は、何も考えなかった。雪見安弥はどうなんだ」ハックはしばらく顔を見つめていた。ハッフルーフはハッサンの

顔を見た後にハッサンを振り返った。

「ハッフルー。僕は、どうするつもりなんだ？」ハッサンはその問いに答えた。

「俺は、雪見安弥を助ける」ハッサンはハッサンに目をやって続けた。「雪見安弥を救うのは、俺ではない。俺なんだ！」「ハッフルーフ」ハッサンはハッサンのほうを向いてハッフルーフと叫んだ。このときハッサンはハッフルーフに、ハッフルーフはハッサンに雪見安弥を助けてほしいと言ったのだということに気づいた。「何で、こんなことになっているんだよ」「ハッサン、これは俺がやったことなんだ。そしてこれからは、雪見安弥を守る」

「そんなこと言うんなら、俺がしてやる。雪見安弥の体を切り刻んでやる。雪見安弥を傷つけるのは、俺しかいない」ハッサンはやれやれ顔でハッフルーフを見つめた。「やってみろよ。そうすりゃ分かるだろう」「俺がしてるのは雪見安弥を守る方法だ」このときハッサンはずっと雪見安弥のことを守ることだと自分に言い聞かせていたが、結結のことだけが考えている訳ではないとハッフルーフは感じていた。ハッフルーフは結のことを考えていた。結はハッフルーフのことが好きなんじゃないかと思っていた。結がハッフルーフのことを考えているんじゃないかと期待していた。ハッフルーフはそんなことを考えていた。

雪見安弥との戦いの後、ハッサンは雪見安弥に命乞いをしていた。ハッフルーフとの戦いであったところに、雪見安弥を救う方法はなかったとハッサンは感じていた。

そして、ハッサンに雪見安弥を助けることはできなかつたとハッフルーフは感じていた。ハッサンは雪見安弥に命乞いをすることで雪見安弥を救うことができると思い込んでいた。ハッフルーフはハッサンが雪見安弥への情を感じていないことに気づき始めていた。

そんなハッサンに初めて雪見安弥が惚れるのがハッサンに雪見安弥に関することを伝えたことでハッフルーフは雪見安弥のことを恋い慕った。そして雪見安弥の命を救うことができない悔しきで泣きながら雪見安弥が家に帰る日を待ちたいとハッサンに思わせた。

すると雪見安弥はハッサンに気づき、泣いてハッサンのために家の近くにある雪見安弥の家に帰って来た。そして雪見安弥はハッサンが雪見安弥に救われるその喜びを思った。雪見安弥はハッサンがハッサンのために雪見安弥に感謝して雪見安弥はハッサンのために雪見安弥と雪見安弥の家で死んでしまいたいと思った。

そして、雪見安弥はハッサンが雪見安弥の家に帰りたいたいという想いが心の中にあっただろうと思うとハッサンがハッサンのために安弥を助けて雪見安弥の家に連れて行ったことにハッサンは雪見安弥を助けたいと思うのである。それなら雪見安弥を救うことができただろうと思うからである。

雪見安弥はハッサンに救われたいと思う気持ちと雪見安弥がハッサンのために雪見安弥の家に連れて行きたいと思う気持ちを心に常にあったのである。そして、このことを雪見安弥にあえてはつきりさせるためにハッサンは雪見安弥と雪見安弥の家に連れて行きたいと思っっている雪見安弥を救うため、雪見安弥は雪見安弥のために雪見安弥に感謝の気持ちを伝えなければならない。そして雪見安弥はハッサンのために雪見安弥と雪見安弥のうち一番近くに位置する雪見安弥の家に行くと言われそのことが心の中にあっただ。そして雪見安弥はたしかに雪見安弥の家に来たのである。

「ありがとう」

出会い頭に二人は感謝を述べた。

「えっ?!」

苦悶する安弥。ばたりと仰向けに転倒する。その胸には深々と蛮刀が刺さっていた。

しまった、と慌てて駆け寄るハッサン。後の祭りだ。雪見安弥は白目を剥いて絶命していた。

「おいっ！しっかりしろ！おいっ。そんな。殺すつもりはなかったんだ」

お礼参りに来たが殺意はなかった。単に刀を突きつけて安弥に月の満ち欠けを再教育したかった。

せめて見開いた目を閉じてやろう。ハッサンはそっと手のひらを当てた。肌が柔らかかすぎる。

「女？」

ハッサンはハタと気づいた。こいつは雪見ではない。連れの人だ。

そして後頭部にぐりぐりと銃口のまさぐりを感じた。

「雪見か！？」

「そうだ。少しでも動いたら銃でなくその刀で八つ裂きにしてやる。

好きな方を選べ」

「なぜ、結に変装させた？」

「知るかよ！ 神の思し召しだ」

「マひよめと…」

まさかと言いつわり終わる前にハッサンの舌は頭蓋ごと壊れた。

浮気女と首のない間男。

その無残な逢瀬を背に雪見は立ち去った。

八方塞がり雪隠詰めの状態は終わった。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
http://www.akatsuki-novels.com/stories/index/novel_id~26119

浮気女と首のない間男。

2021年08月22日 07時17分発行